

## 出土楽器が語る音の世界—注目される秦の音楽文化—

## 注目される秦の音楽文化

儀礼とその音楽のあり方を重視する儒家が重んじられるようになるのは漢代になってからである。しかしながら、古代中国音楽

史の研究では、これまで儒家を軽視したとされる秦代と儒家を重んじた漢代が、「秦漢時期」という一つの括りを取り上げられてきた。中国音楽史のバイブルとも考えられる楊蔭瀏『中国古代音楽史稿』（人民音楽出版社 1981年）に第五章「秦・漢」とあり、余甲方『中国古代音楽史』（上海人民出版社 2014年）でも「秦漢音楽」として説明がなされている。その理由は、秦代の文献資料が極めて少なく、それに比して漢代資料は豊富などころにあると考えられる。しかしながら、漢代の音楽機関として認識されてきた「楽府」も、実は秦代に創建されていたことは、始皇帝陵からの「楽府鐘」（上図『中国文明史図説 秦漢：雄偉なる文明』4 創元社 2005年29頁）の出土によって知られている。それは、つとに北京大学の陰法魯氏が「考古資料与中国古代音楽史」（『中国歴史博物館館刊』第13/14期1989年）で述べている。最近では、劉再生氏の『中国音楽通史 古代音楽卷』（人民音楽出版社 2023年）に、その第四章で「秦漢時期音楽」とひとくくりにしながも、漢の武帝が楽府を設立したというこれまでの認識は訂正されねばならず、秦王朝のときにすでに楽府が設立していたと明言している。漢代の文献記録によって歪められてきた秦代音楽文化の研究が今後は進められるだろう。

最近では、秦の始皇帝の兵馬俑からの出土によって、その東南には百戲俑と呼ばれる皇帝のための雑技集団の俑が見つかり、また皇帝陵の北に池を模した溝の両岸に青銅の鶴や白鳥が配された水禽坑が発見され、そこには楽器を奏する楽士俑も出土して、皇帝



の宴を再現したとされている（村松弘一「秦始皇帝の兵馬俑—色彩豊かな秦の地下軍団」『中国文化事典』丸善出版 2017年）。また、「音楽好きの秦人」と、上記の『中国文明史図説』にもみえ、その独特な形の編鐘（左図 同上27頁）も取り上げられている。そもそも秦代の『呂氏春秋』には音楽について記したところがあり（「十二紀」仲夏紀「古楽」）、古代音楽を考えるうえで重要な資料となっている。そこには、天下がうまく治まっていた古の朱襄氏の御代には、たとえ自然の陰陽のバランスを欠いても、士達という臣下が五弦の瑟を奏でると調和が保たれた、という話が収録されている。また、かの中国の伝説上にはしばしば登場する黄帝が、伶倫という臣下に楽律（十二律）を作らせたことも載っている。大夏の西の崑崙山の北にある谷の竹を三寸九分に切って吹くと、黄鐘の宮という音が得られた。それをもとにして鳳凰の鳴き声によって十二の音を決めたというのである。それこそが後世の中国の楽律の根幹を成してきたことを考えると、儒家を重んじない秦代に、後世の儒家の楽論とは違った意味で、音楽の重要性がすでに認識されていたと思われる。付言すれば、『呂氏春秋』は秦が中国を統一するのにプレーンとして貢献した呂不韋が編纂させた書物であり、始皇帝もそのなかの

「十二紀」を中心として、その内容を理解していたとされる（鶴間和幸『始皇帝の愛読書』第二章 山川出版社 2023年）。

## 咸陽宮の銅人

そんな秦代に、以下のような逸話が残されたのは偶然ではない。

秦の咸陽宮に、銅製の人形が十二体あり、みな三尺（漢代では一尺が23cmほど）だった。人形は一つの筵に並び、それぞれが琴・筑・竽・笙を持っていた。どれも紐組をつけたあでやかな衣裳は、まるで生きている人のようだった。筵の下には、二本の銅管が通り、それが数尺の高さのところまで伸ばされていた。うち一管は空洞で、もう一管の方には、指くらの太さの繩が入っていた。一人が空洞の管に息を吹きこみ、もう一人が繩をひきしめると、琴・瑟・竽・筑がみな演奏され、まるで本物の楽隊と変わらなかった。（秦咸陽宮中有銅人十二枚，坐高皆三尺。列在一筵上，琴筑竽笙，各有所執。皆組綬華采，儼若生人。筵下有【二】銅管，上口高数尺。其一管空，【一管】内有繩，大如指。使一人吹空管，一人紐繩，則琴瑟竽筑皆作，與真樂不異）（【 】は、『四庫全書』所収『西京雜記』により補った）

これはもともと漢の劉歆『西京雜記』（後に晉の葛洪が編集）にみえる逸話で、宋代に編纂された『太平広記』巻203に「咸陽宮銅人」と題して採録された。ほかにも、「昭華管」と題して、吹くと車馬や山林が眼前に現れる咸陽宮の笛の話もみえる。楽人の人形があったことについては、あの兵馬俑を作り出した秦の始皇帝の時代ならさもありなんではある。始皇帝陵の地下宮殿では近づくものがあれば機械仕掛けの弩が発射されるようになっていたという（鶴間和幸『始皇帝陵と兵馬俑』講談社学術文庫 2004年 228頁）。それを考えれば、こうしたからくり人形もできないはずはない。『西京雜記』には、ほかにも始皇帝陵の墳丘のうえの石製の麒麟の前足が折れて、血のような赤いものが付いていたのを見た地元の父老が、石の麒麟にも血や筋があって生命があると云った、という話もみえる。まるで生きているかのように麒麟が設えられていたということだろうか。それは不思議な話というよりも、当時の技術がそれほど優れていたことに驚嘆するべきなのかもしれない。

『列子』という書物にも、先秦の話として周の穆王のときに、ある匠が生きているかのような人形をつくったという記載がある（「湯問篇」）。それが合図にしたがい音律に合わせて歌ったり、リズムに合わせて踊ったりして、穆王もそれが人形とは思わないほど精巧なものだった。『列子』は、前漢から西晋までに編纂されたものであるとされており、その記載内容はすべて先秦とは断定できないが、先に引用した『西京雜記』からは、秦代には優れた技術をもつ匠が確かに存在し、楽人の人形が実在したことが伺える。

われわれ日本人は江戸時代のからくり人形の動きに目を見張るが、そのなかには「鼓笛児童」と呼ばれる笛と鼓を鳴らす人形もあった（『機巧図彙』下巻）。それよりもはるか以前の秦の時代に、精巧なものが作られたのは、権力者の下に集められた技術者集団が、権力者の威信をかけて心血を注いだ結果であった。文化的な優位性を示すことにより、民の心を手中にすることが、神とつながることと同じくらい重要だったのかもしれない。咸陽宮の銅人は、そんな民の驚きと服従を勝ち取るためのものでもあったろう。